

阪神間の消費生活文化の源流を考えるにあたって (一)

～ 明治・大正期における箕面、宝塚、甲陽園のカフェーパウリスタについて ～

海 老 良 平

要 旨

本稿の主題は、近代のモダンな文化の象徴として知られる珈琲店、カフェーパウリスタの阪神間における展開について考えるものである。20世紀初頭に始まるブラジルへの移民事業から誕生したカフェーパウリスタは、同国から無償供与された珈琲豆の販売によって、明治末期から大正時代における日本の珈琲普及に貢献した珈琲店であり、その名は三越本店、帝国劇場と並び、大正時代のモダンな街、銀座の象徴として、また知識人や文化人、芸術家などが集まるサロンとして、広く知られている。

ところで、そのカフェーパウリスタの初期の活動が、大阪、神戸の郊外である阪神間において展開していたことが、近年になって地元の自治体などによる調査研究を中心に明らかとなってきている。その出店場所であったのが、阪神間の箕面、宝塚、甲陽園の三地域であり、それらに共通するのは私鉄や地元の資本家によって大規模にレジャー開発された地域であったということである。これまで東京の都心を中心に展開したとされていたカフェーパウリスタの初期の活動場所がなぜ、郊外の阪神間、しかもレジャー地であったのか、ここに本稿の問題意識がある。本稿では箕面、宝塚、甲陽園でのカフェーパウリスタの概要を整理しながら、阪神間におけるその出店の意味を考えてみたい¹⁾。

キーワード：阪神間モダニズム、カフェーパウリスタ、郊外レジャー開発

はじめに

人口減少社会の到来による地域の活力低下への懸念については、全国各地が共通して有する喫緊の課題であり、今後の街の活性化に向け、各地域が特色ある多角的な地域創生戦略をもって取り組むようになって久しい。そのうち各地で遍く取り組まれている施策の一つが観光振興であるが、地方都市においては、域外からの観光誘客が交流人口の増加をもたらす、域内の社会経済に広く貢献できる役割を果たすことに期待されている一方で、大都市圏においては、定住人口の増加もしくは維持を図るべく、都市の魅力の発信手段として地域文化資源の発掘を軸とした観光事業を推進しているところが少なくない。

本稿の対象となる阪神間地域を構成する各都市においても、「住みたい街」として選ばれるような都市ブランド化を地域活性化戦略の核に据えた自治体が多く、そこで鍵概念となるのが、この地に近代から根付いている、洗練された消費生活文化としての「阪神間モダニズム」である²⁾。

阪神間モダニズムとは、明治末期から昭和初期にかけて、大阪から神戸にかけての六甲山麓に開発された郊外住宅地に移住した富裕層や芸術家、文化人、また中産階級家庭を担い手として発展した地域特有の文化であり、そのモダンなライフスタイルは、現代においても酒、スイーツやパン、ファッションといった阪神間の特徴となる生活様式、産業文化にも受け継がれている。そしてその「阪神間モダニズム」文化の一つとして挙げられるのが、本稿の主題となる珈琲、カフェである。

阪神間は神戸港に隣接していることもあり、近代以降、珈琲文化が他の地域に先駆けて移入される土壌があったことは言うまでもないが、日本の珈琲史において、その大衆化に大きな役割を担ったと言われるカフェーパウリスタの初期における活動が阪神間で展開していたことは長く知られていなかった。さらに本稿が目にするのは、その阪神間における出店場所に共通しているのが、当時、この地域で開発が進んでいた郊外遊園地であったことである。後に三越や帝国劇場と並び、モダン銀座の象徴として知られるようになったカフェーパウリスタが、なぜ阪神間の郊外レジャー開発が盛んであった地域に出店したのか、そしてそれが阪神間モダニズムを考える上でどのような意味合いを持つのか、そこに本稿の問題意識がある。

そこで本稿では、カフェーパウリスタが出店した箕面、宝塚、甲陽園の各店に関するこれまで明らかになっている事柄を整理、または必要に応じてそれを補足しながら、阪神間におけるその出店の意味を考えてみたい。

1. カフェーパウリスタについて

慶応4年（1868年）の神戸港開港に伴って、神戸港に隣接する海岸部には外国人居留地が設置されたことにより、来日する外国人にとって必要不可欠とも言える珈琲へのニーズが自然と神戸に根付いていったことは想像に難くないが³⁾、そのような開港後の神戸にあって、珈琲の輸入、販売のはしりとなったのが、明治7年（1876年）に元町通りに開店した「放香堂」である。同社は元々、山城国で自家茶園を経営し、卸売を営んでいたが、開港後の神戸に輸出商館を設けてフィリピン諸島のダヴァオなど諸外国への日本茶の輸出取り扱いをはじめ、その一方で珈琲の輸入も手掛けていたという⁴⁾。明治11年（1878年）には、讀賣新聞に「珈琲販売および店頭にて喫茶ご自由」の広告を掲載しており、これは日本における珈琲販売の先駆けとも言われる⁵⁾。

そして、本稿の主題となるカフェーパウリスタの誕生にとっても、神戸はその原点とでも言うべき場所である。これまで様々なところで述べられてきたように、カフェーパウリスタとは、明治末期に始まるブラジル移民事業を契機に誕生した珈琲店であるが、神戸はまさにそのブラジル移民発祥の地でもある⁶⁾。

ブラジル移民の歴史は、明治41年（1908年）4月28日に初のブラジル移民を乗せた移民船「笠戸丸」が神戸港を出港し、6月18日にブラジルサントス港に到着したところに始まるわけだが、この最初の移民を引率したのが皇国殖民株式会社であり、その代表であったのが「ブラジル移民の父」とも呼ばれる水野龍である。前年にブラジルサンパウロ州と移民契約を交渉していた水野は、耕地に長く定着する日本人移民を求めたブラジル側の求めに応じて日本国内で781名の移民希望者を募り、東洋汽船会社からチャーターされた「笠戸丸」にて移民希望者を移送、サンパウロ州の六つの大農場に農業労働者（コロノ）として送り込んだ。

第一回のブラジル移民が到着した年、サンパウロ州政府は移民事業を担った水野の功績、また日本での珈琲普及と販路拡張を目的として、今後三年間にわたって70キログラム入りの珈琲豆7,125袋を無償供与し、その珈琲豆を売り捌くための珈琲店を日本各地に開店する契約⁷⁾を水野と結ぶ⁸⁾。この契約では東京に8軒、横浜と大阪に各2軒、京都、神戸、長崎に各1軒の出店が求められ、水野はその契約に基づき、「ブラジル産珈琲輸入飲食料品の販売」を目的として、明治44年（1911年）2月、東京府日本橋区通⁹⁾に合資会社としてのカフェーパウリスタを設立し¹⁰⁾、全国に珈琲店を出店していくこととなる。

珈琲研究の代表的文献である奥山儀八郎の『珈琲遍歴』では、カフェーパウリスタの全国の出店状況が詳細に記載されており、サンパウロ州との契約に近い出店数、配分となっていることが分かるため、改めて引用しておく（奥山、1973：274-275）。

- 1 本社喫店 麴町区有楽町一丁目
 - 2 伝馬町喫店 京橋区南伝馬町三丁目
 - 3 錦町喫店 南錦町二丁目
 - 4 堀留喫店 日本橋堀留三丁目
 - 5 神田喫店 神保町
 - 6 早稲田喫店 小石川関口水道町
 - 7 日比谷喫店 日比谷公園内
 - 8 浅草喫店 浅草公園内
 - 9 戎橋喫店¹¹⁾ 大阪南心斎橋筋
 - 10 松島喫店 南末吉町三丁目
 - 11 横須賀喫店 横須賀市大滝町
 - 12 三ノ宮喫店 神戸市三ノ宮
 - 13 京都喫店 下京区四条京橋中三下
 - 14 仙台喫店 仙台市東一番町
 - 15 北海道喫店 札幌区北二条西
 - 16 静岡喫店 静岡市北間一丁目
 - 17 九州喫店 福岡市博多東中洲
 - 18 名古屋喫店 名古屋市南大津町一
 - 19 上海喫店 上海南京路第四四八号
- この他に大阪南長堀橋に支店をおいた。

奥山の記載に阪神間での店舗がないように、長らくカフェーパウリスタの第一号店は、明治44年（1911年）12月12日に京橋区南鍋町に開店した銀座店であると考えられてきた。しかし近年になって、出店の初期の段階で阪神間に展開していたことが各市の市史史料の編纂過程や市民団体による地域史の掘り起こしによって明らかとなってきており、その店舗が本稿で取り上げる箕面、宝塚、甲陽園の三店舗である。

2. 箕面とカフェーパウリスタ

大阪北部に位置する箕面は元々、江戸時代の『摂津名所図会』にも描かれる滝の名所であった。明治時代に大阪府によって箕面公園が設置され、明治30年（1897年）に阪鶴鉄道が開通した後は、五十丁余り（約5キロメートル）離れた池田駅から馬車や人力車によるアクセスが発達し、公園一帯には旅館や料亭が並ぶようになり、近代の大阪における屈指の郊外行楽地となったとされる。そして、明治43年（1910年）3

月には箕面有馬電気軌道（現在の阪急電鉄、後、箕有電軌と略す）が開通し、同社における新たな郊外レジャー開発が開始される。

その開発の核となったのが、同年に開業した箕面動物園である。箕面動物園は園内に自然の造形を活かした動物舎をはじめ、観覧車や芝居小屋などを備え、動物の曲芸や御伽芝居、児童博覧会などの数々の催しが行われるなど、エンタテインメント性の濃い動物園であった。また、箕面駅前には箕面公園入口のシンボルとなる「金星塔」と呼ばれた電飾塔¹²⁾、さらに公会堂、運動場等も設けられ、公会堂では様々な展覧会の開催、また運動場では模型飛行機大会やテニス大会などが催され、動物園と一体化して、箕面駅前一帯はさながら大レジャーランドの様相を示していた。

箕面喫茶はそのような立地環境の中、開店したのであった。その店舗について箕面市のホームページには以下のように記されている。

カフェパウリスタ箕面喫茶は、明治44年（1911年）6月25日に、箕面駅前金星塔の東側の洋館で開店しました。建物の東西の壁にはカフェパウリスタのマークがついていました。カフェパウリスタでは店のことを「喫茶」と呼んでいます。専門店としてコーヒーを提供する店としては、大阪で1、2を争うほど早い時期の開店です。この店の出店には大阪製菓株式会社取締役の渡邊益夫が関わっており、同社のお菓子とコーヒーのセットが10銭で提供されていました。営業期間は不明ですが、明治45年（1912年）1月26日付けの大阪朝日新聞に掲載された「カフェパウリスタ道頓堀コーヒー店」の開業広告中に、「東京、大阪、箕面、宝塚」と記されており、この時にはまだ営業していたようです¹³⁾。

箕面市総務課が所蔵する写真絵葉書（写真1）に写る木造の建物が、カフェパウリスタ箕面喫茶である。開店前日には、大阪時事新報および大阪朝日新聞に箕面喫茶開業告知の広告が掲載され、そこには「COFFEE WITH CAKE 10SEN」の文言がある。銀座店以降のパウリスタの標準価格が「一杯五銭」であったことが当時の広告などから分かっており、箕面での価格はその倍であったようである。

箕面喫店の運営にあたった渡邊益夫については、同年7月3日の大阪時事新報に「元製菓会社の専務渡邊益夫氏等はブラジル国サンパウロ州政府の専属として日本人に生粋の珈琲を味はしめんため今回カフェパウリスタ合資会社を組織し、その第一着手として箕面公園停留所前にブラジル式の珈琲店を設け（以下略）」と記されており、彼が取締役を務めていた大阪製菓株式会社は、明治34年（1901年）に設立され、洋菓子製造を営んでいた¹⁴⁾。

箕面喫店の営業は1年ほどで、その後閉店したというが（長谷川，2008）、閉店時



写真1 箕面停留所前の金星塔右に見える白い建物がカフェパウリスタ箕面喫店
(箕面市行政史料(個人寄託))

期は定かではない。箕面閉店後は大阪御伽倶楽部¹⁵⁾の事務所として使用していたと考えられ、大正時代になって箕有電軌の豊中駅前に移築、倶楽部に転用されたという(箕面市ホームページ)。

3. 宝塚とカフェパウリスタ

兵庫県南東部に位置する宝塚は、元々温泉地として発展を遂げた行楽地である。明治20年(1887年)に地元の有力者たちによって発見された鉱泉をもとに宝塚温泉が開業し、明治30年(1897年)の阪鶴鉄道開通後には、旅宿業等の増加によって大阪近郊の温泉地としての輻輳の地となっていく。さらに、明治43年(1911年)の箕有電軌の開通によって、宝塚は「旅館料亭の激増、物価地価の騰貴は驚くべき高潮を示し、遊客また跡を絶たず轉た隔世の感に堪へざらしむ」(藤井, 1913:8)と賑わう中、明治44年(1911年)からは、箕有電軌による本格的なレジャー開発が始まる。

その核となったのが、旧来の宝塚温泉の武庫川対岸に開業した宝塚新温泉である。明治45年(1912年)には近代的温泉施設「パラダイス」が新設され、「パラダイス」内には温泉の他に室内プール、図書室、食堂などの設備、また女性や児童を対象とした博覧会が多く開催された。中でも大正3年(1914年)に開催された婚礼博覧会では、宝塚少女歌劇の第1回公演となる「ドンブラコ」が上演され、その後、少女歌劇は宝塚の代名詞となっていくことは言うまでもない。大正13年(1923年)には4,000人収容の宝塚大劇場、また遊園地宝塚ルナパークが開業し、宝塚は日本を代表する一大レジャーパークとなっていく。



写真2 宝塚新温泉に開業したカフェパウリスタ宝塚喫店
(宝塚市立中央図書館市史資料室提供)

そのような中で開業したカフェパウリスタ宝塚喫店の存在について、唯一手がかりとなるのは、宝塚市立中央図書館市史資料室が所蔵する写真絵葉書（写真2）、明治45年（1912年）1月26日付けの大阪朝日新聞に掲載された広告のみである。写真絵葉書に写るメニューには「コーヒー（菓子付）十銭」とあり、宝塚喫店においても箕面と同様の価格設定であったことが窺える。

出店場所については「（寶塚新温泉）カフェパウリスタ」の文字があることから、宝塚新温泉内と考えられるが、正確な場所は不明である。当時の新温泉内の施設配置図については、大正2年（1913年）発行の『寶塚案内誌』に簡易な案内図があるが、全体の配置を説明するのみであり、パウリスタの文字はない。また他にも同市史資料室には宝塚新温泉の館内案内図が多数残っており、その中には喫茶室が明記されているものの、最も古いもので昭和初期のものであるため、それが宝塚喫店かどうかの確証はない。

営業時期についても不明である。前述の大阪朝日新聞に掲載された広告に宝塚の文字があるため、少なくともその時期に営業していたことは推測できる。また、大正9年（1920年）発行の『宝塚沿線名勝誌』では新温泉内の各施設の案内と順路を詳細に記述しているが、カフェパウリスタの文字はない。同書の巻末には宝塚駅前にあったとされるカフェクレナイの広告が掲載されており、仮に宝塚喫店が営業していれば、その名が記されていることが自然であり、それがいないことから推測すれば、遅くともその時期において、宝塚新温泉内でカフェパウリスタは営業していなかったのかもしれない。

4. 甲陽園とカフェーパウリスタ

西宮七園とも呼ばれる高級住宅地である甲陽園は、六甲山系の甲山の南麓一帯の地域であり、この地区を大正時代に開発したのが、大阪電燈株式会社の坂野鉄次郎らの後援を得て、甲陽土地株式会社を設立した本庄京三郎である。元々入会地であったこの土地を入手した本庄は、大正7年(1918年)から高級住宅地開発を始めるが、その促進のためにカルバス温泉を設置し、付近には多くの旅館や料理屋が立ち並んだという。さらに一万坪に余る大グラウンド、甲陽歌舞劇場、東亜キネマのスタジオ、カルバス温泉、甲陽旅館、甲陽倶楽部をはじめ、貸しボートのある小松池、動物園、植物園、音楽堂、大すべり台やサークリングといった遊具施設を有する遊園地など、甲陽園一帯は大レジャーランドとなっていく(阪神急行電鉄株式会社編, 1924)。甲陽歌舞劇場では少女歌劇が上演されるなど宝塚を意識したエンタテインメントが見受けられるとともに、大正12年(1923年)には、甲陽園にあった映画撮影所を買収し設立された東亜キネマ株式会社の撮影所が誕生するなど、甲陽園は関東大震災後の日本の一大映画撮影所ともなっていく。

そのような立地環境にあったカフェーパウリスタ甲陽園喫店については、西宮市のホームページに以下のように記されている。

甲陽園を開発した本庄京三郎氏が「大阪カフェーパウリスタ」の社長であり、甲陽土地株式会社事務所とともに、その1階にパウリスタの支店を開設したこともあげられるのではないのでしょうか。ブラジル移民の父といわれた水野龍がはじめたカフェーパウリスタは日本全国に展開し、大正12年以後はそれぞれの店舗が経営をはじめます。銀座や浅草の店舗に多くの文化人が集まり、文化活動の拠点となっていました。東京から来た映画人・文化人は、カフェーパウリスタが、大阪や三宮だけでなく甲陽園にもあるのを知り、なつかしさから好んで足を運んだようです。甲陽園のパウリスタでかつて親しんだ知人と再会し、旧交をあたためるうち、新たな文化拠点となっていくと思われ¹⁶⁾。

西宮市総務課公文書・歴史資料チームが所蔵する写真絵葉書(写真3)に写る手前の洋館がカフェーパウリスタ甲陽園喫店である。また、平成14年(2002年)に西宮コミュニティ協会が発行した「宮っ子」では、写真とともにカフェーパウリスタと周辺の地図が地元住民の手によって作成されており、出店場所(西宮市本庄町)も明らかとなっている。

この甲陽園喫店に深く関連すると考えられるのが、東京本社のカフェーパウリスタ



写真3 一番手前の建物がカフェパウリスタ甲陽園喫店
(西宮市総務課公文書・歴史資料チーム提供)

から独立した株式会社大阪カフェパウリスタである。同社は大正8年（1919年）9月に、代表を甲陽園開発当事者の本庄京三郎、取締役にも宅米蔵、大和卯三郎、齋藤鷹、小野捨次郎、監査役に橋本金三郎、梁瀬兵として設立され、取締役の大和は水野と合資会社カフェパウリスタを設立した際の共同代表でもあった¹⁷⁾。

一方、甲陽園での出店の詳細な時期については不明である。大阪カフェパウリスタの設立に近い時期では、大正8年（1919年）12月23日付けの「官報」にカフェパウリスタの広告が掲載されている。この広告には当時のカフェパウリスタが売り出し中であったコーヒーソーダと並んで、リネル平野水の宣伝があり、これは本庄が同年に平野鋳泉株式会社の社長にも就任していたことからの繋がりが窺えるものであるが、甲陽園の文字は見当たらない。一方で、大正13年（1924年）発行の『阪急沿線案内』には、甲陽園案内としてカフェパウリスタの記載が確認でき、この時期には営業していたことは窺える。

5. 郊外レジャー地に出店したカフェパウリスタの意味

さて、前述の奥山儀八郎は、カフェパウリスタの出店場所の特徴を「各都市のパウリスタの立地条件を少し注意して見ると、労働者、店員、学生、軍人他小市民の集まる場所を選んでいることがわかる」（奥山、1973:274）と言う。これは阪神間のカフェパウリスタの立地していた郊外レジャー地にとって主な顧客対象となる子供連れの家族像とは異なるものであることが注目すべき点である。都心部とは異なる郊外レジャー地にとって、カフェパウリスタの出店はどのような意味を持っていたのだ

ろうか。

カフェーパウリスタが阪神間で展開した明治末期から大正期とは、大阪の産業革命が成長期から成熟期に差しかかり、一段と大阪経済が活気を帯びる一方で、都市公害が顕著となり、私鉄各社が中心となり大阪郊外での生活の有用性が説き始められた時代である。明治中頃から大阪の企業家たちによる移住が進んでいた中で、明治38年(1905年)の阪神電気鉄道、明治43年(1910年)の箕有電軌の開業により、サラリーマン家庭による郊外住宅地への定住が促進され、郊外生活のライフスタイルが広く定着していくこととなる。

そのような新たなライフスタイルにおいて、家族で休日を過ごす郊外レジャーへの志向も高まり、特に阪神間においては、私鉄系および資本家、土地開発会社などの様々な主体によって開発された郊外遊園地が数多く誕生していく。例えば、明治40年(1907年)に大阪の砂糖商である香野蔵治と株仲間買人の樋山慶次郎によって開発された香櫨園遊園地は、8万坪を有する巨大な郊外遊園地のはしりとなり(阪神電気鉄道株式会社臨時社史編纂室編修, 1955)、その後、同様の郊外遊園地が明治末期から大正期にかけての阪神間に続々と誕生し、これらは昭和から平成にかけて、都市郊外に私鉄によって開発される日本の遊園地、テーマパークの原型となっていく。

そのような香櫨園をはじめ、箕面、宝塚、甲陽園など阪神間で開発された郊外遊園地に共通して存在していたのが、動物園、公会堂、音楽堂、劇場といった近代的な娯楽文化装置であった。そのような近代的な施設を持つ公園(遊園地)の源流として挙げられるのは、日本で初の西洋式の公園として明治36年(1903年)に開園した日比谷公園と言えよう。日比谷公園には公会堂、音楽堂等が設置されるが、その目的は市民への近代文化の啓蒙の場所としての役割を担うことであった。

そしてそれらの文化装置と同じく重要な存在であったのが洋風の喫茶やレストランであった。東京市の公園課長であった井下清は「音楽とともに大衆に新しい魅力となつたのは、公園の洋風の喫茶と食事であつた。家族づれで公園へ行楽し、花を眺め、洋楽を聴き、中央の喫茶店で白いテーブルクロスをかけ盛花を飾つた卓で、香りの高いコーヒーを飲み、ナイフ、フォークを使つて洋食を味う新しい社会生活の流行が興つたことである。これ等の行楽の態度は誰れが指導したのか、欲州風のエチケットが上層部ばかりでなく民衆化することとなつたことも新公園の影響であつたと思う(原文ママ)」(井下, 1973:240)と、公園内のレストランや喫茶店もまた、洋食という近代の文化啓蒙の役割を担ったことを述べているが、この公園中央の喫茶店である松本楼は、大衆にハイカラな習慣を植え付け、明治40年(1907年)の三越における食堂開業に大きな影響を与えたとも言われ(初田, 1999)、また「パンの会」と呼ばれる文化人の交流のサロンとしての役割も果たしたという(西島, 2003)。

箕面や宝塚、甲陽園内のカフェパウリスタの存在が、大衆にどれほどハイカラな習慣を植え付けるだけの存在であったか、そしてサロンとしてどれほどの役割を担ったか、資料が少なく現在のところ明らかではないが、箕面喫茶店開店から約半年後に開店した道頓堀喫茶店においては、関西文化の発信地として多くの文化人による交流拠点となり、また箕面と同年に開店した銀座喫茶店においても時事新報社の向かいにあったことから多くの知識人が集う場でもあった（長谷川，2008）と言われることから、カフェパウリスタが珈琲普及だけでなく、文化的なサロンの役割を担っていたことは確かである。また西宮市のホームページが記すように、甲陽園喫茶店は、関東大震災によって関西に移り住むこととなった東京の映画人が集まる場所でもあった。

そして、箕面、宝塚を開発した箕有電軌創立者の小林一三もまた、沿線に文化の象徴としてのサロンの設置に強い関心を抱いていたといわれ、その思い入れは同社が最初に住宅開発を手掛けた池田室町にも表れていた。社交の場と目論んで建設された「室町倶楽部」には玉突きや囲碁・将棋盤などの娯楽を備え、また購買組合を設置するなどコミュニティセンターとしての役割を図ったという（池田市史編纂委員会，2009）。

しかし彼は自叙伝で倶楽部の設置は失敗だったと語るように、到来しつつあったサラリーマン社会におけるニーズを読み取ることに苦勞している。住宅に関して西洋風の建売は阪神間の高級住宅街においてすらも、純洋式の売家には買手がなく、生活様式が進歩しても畳敷が愛されて、純洋式は不評であると当時のサラリーマン階級が和洋折衷を望む傾向を述べている（小林，2000）。しかしながら小林自身は国民生活の早急の洋風化を希望しており、箕面、宝塚のカフェパウリスタにそのようなサロンの洋風化の夢を描いていたのかもしれない。

箕面、宝塚、甲陽園の遊園地をめぐる環境を考えると、周辺には旅館や料亭といった近世以来の行楽地の要素も色濃く残っており、近世と近代の娯楽が混在する時代の境目に築かれた郊外遊園地でもあったと言える。宴会や集会が開かれるようなそれまでサロンとしての役割を担ってきた旅館や料亭が立ち並ぶ中でのカフェパウリスタの存在は、まさに新時代の文化を啓蒙できるような、近代を象徴するものだったのかもしれない。

結びにかえて

阪神間モダニズムとは、幕末の条約により開港した神戸港から移入される新世界の文化、新時代の生活様式に、地縁を重視する近世以来の大阪町人文化が融合した当地特有の生活文化であった。それは竹村民郎が言うように「マシュマロにも似たブル

「ジョワ近代文化」であり、住民に浸透した「郊外の生活にたいするプライドとスノッブな意識」により構成される近世への愛着と近代への憧れを股にかけた特異な文化であった(竹村, 2012)。阪神間のカフェーパウリスタとは、近世の旅館や料亭と近代娯楽が混在するレジャー行楽地に、ブラジル珈琲という近代文化を持ち込んだ類を見ない存在だったのかも知れない。さらに竹村はこのように言う。

阪神間の山紫水明の風土が育てた洗練された感性やファッション、大学群、少女歌劇、甲子園球場、美術館群、さらに多彩な学術文化、芸術、芸能活動を核としたいわゆる「阪神間モダニズム」の成立は、小林一三という卓越した事業家や、阪神間に移住してきた知識人たちの努力の賜と考えるのはあまりに単純すぎる。阪神間におけるマルチカルチャー社会の萌芽的形成の背後にはそうした人々の努力だけではなく、地元住民たちの長い時間をかけた町づくりの積み重ねがあったことも事実である。(竹村, 2012:144)

阪神間のカフェーパウリスタは営業終了後、面影そのままに住民に浸透した存在となっていく。箕面喫茶については、箕面から隣接する阪急豊中駅前に移転された後、近年まで豊中倶楽部自治会館として長く市民に親しまれ続け、甲陽園喫茶もその場所を動くことなく地元市民の住宅として愛用されてきた。現在は、箕面喫茶、甲陽園喫茶ともに老朽化のため解体されたため¹⁸⁾、今や、箕面、宝塚、甲陽園に存在したカフェーパウリスタを示すものはなく、そしてまた、レジャー開発から始まったそれぞれの地域は、現在「住みたい街」としての阪神間を代表する高級住宅地となり、宝塚の劇場を除けば、その面影は残っていない。しかし、箕面喫茶の建物は、平成21年(2009年)の朝日新聞で最古のカフェが豊中にあったとの見出しで取り上げられ、注目を集めた。また甲陽園喫茶は、建物が解体される直前に一般公開され、一日で800人の見物客が訪れたという。ともに埋もれていた我が街の文化資源への市民の関心の高さを示すものであった。

謝辞

史料の提供にあたっては、箕面市総務部総務課、宝塚市立中央図書館市史資料室、西宮市総務課公文書・歴史資料チームの方々にご協力頂きました。御礼を申し上げます。

本研究は、大手前大学交流文化研究所の研究企画助成を受けたものである。

注

- 1) 「阪神間」とは一般的に、現在の兵庫県西宮市・芦屋市・神戸市に跨る六甲山麓の南側一帯を中心として扱われるが、その明確な定義や範囲・区分は存在しない。本稿で取り上げる兵庫県宝塚市、大阪府箕面市を阪神間として捉えるかは議論すべき点ではあるが、「阪神間」とは単なる地理的名称としてだけでなく、文化的意味を含む固有名詞としても扱われることから、宝塚や箕面が属していた旧摂津国の歴史的な文脈上、また阪神間文化の形成にとって重要な役割を果たした阪急電鉄の沿線都市でもあることから、本稿では「阪神間」地域として取り扱いたい。その上で「阪神間」の明確な定義や範囲・区分を明らかにすることは、本研究で今後考えるべき最も重要な課題の一つである。
- 2) 平成29年（2017年）より神戸市、芦屋市、西宮市の三市と阪神電鉄が共同で「阪神間連携ブランド協議会」を発足し、地域の活性化と都市ブランドの向上に取り組んでいる。その活動の一環として阪神電鉄は「阪神電車で行く！知る・見る・巡る阪神 KAN お散歩マップ」を発行し、これまでに「近代建築編」「スイーツ・パン編」「ミュージアム編」「文学編」「自然とスポーツ・レジャー編」「珈琲・紅茶編」の6テーマで沿線観光の促進を図っている。
- 3) 居留地で開業した神戸オリエンタルホテルについて、イギリス人作家のラドヤード・キプリングは「オリエンタル・ホテルのオーナー、素晴らしいベグー氏に讃歌を捧げておこう。ベグー氏に平安あれ。彼のホテルでは本物の料理が食べられる。ただ食べさせればいいという姿勢では断じてない。彼の出すコーヒーは、美し国フランスの正真正銘のコーヒーだし、お茶の時間にはペリティのケーキが出てくるし（しかもこちらのほうが美味しい）、定食についてくるテーブルワインの味の良さよ！」（ラドヤード・キプリング、2002:95）と提供される珈琲と洋菓子を賞賛している。
- 4) 放香堂の神戸出店の背景には、開港直後の神戸港の最大の輸出品目が日本茶であったことがあると考えられる。日本茶輸出の名残として、平成21年（2009年）には神戸市役所建て替え工事によって製茶工場の遺跡が発見され、注目を集めた。
- 5) 日本で初めて珈琲を提供したのは、明治9年（1876年）に横浜の見世物小屋で珈琲を出した下岡蓮杖と言われ、また日本初の喫茶に関しても明治21年（1888年）の東京上野の「可否茶館」とも言われる（星田、2003）。
- 6) 神戸市中央区山本通にある「神戸市立海外移住と文化の交流センター」は、昭和3年（1928年）に設立された「旧国立神戸移民収容所」が保存、再整備されたものである。その玄関前には「ブラジル移民発祥之地」の碑が建っており、また神戸港メリケンパークにも「神戸港移民乗船記念碑」が建っている。
- 7) 国立公文書館アジア歴史資料センターホームページ公開「11. 伯国産珈琲本邦ニ於ケル販路拡張契約ニ関スル件」茶関係雑件附珈琲「ココア」第四卷（外務省外交史料館）
- 8) ブラジルが通関統計に初めて登場するのは大正5年（1916年）になってからであり、『大日本外国貿易年表大正5年下篇』によれば、数量は85,810斤、金額は39,160円であった。財務省の「貿易統計」によれば、令和元年の我が国のコーヒー生豆の輸入先の第一位はブラジルであった。同国からの輸入数量は116,816トンであり、これは我が国の総輸入量の391,611トンのうち約3分の1を占めている。
- 9) 翌年に本社を京橋区南鍋町に移転している。

- 10) 大正2年(1913年)には株式会社化しており、この時の役員は会長に水野龍、専務取締役に梁瀬兵、取締役には神谷忠雄、石崎震二、山田良助、監査役に石川澤吉、巖本善治となっている(『日本全国諸会社役員録 第28回上編』234頁)
- 11) 明治45年(1912年)1月26日には道頓堀店も開業している。
- 12) 箕面有馬電気軌道が電力供給事業を開始した同年の7月1日に建てられた塔である(京阪神急行電鉄, 1959)。
- 13) 箕面市ホームページ「箕面の時空探検」。
- 14) 『日本全国諸会社役員録 明治44年上編』209-210頁。
- 15) 大阪御伽倶楽部は、箕面での御伽芝居や児童博覧会をプロデュースし、後の宝塚少女歌劇にも携わっていた団体でもあった。
- 16) 西宮市ホームページ「【甲陽園】華やぐ映画撮影所」。
- 17) 『日本全国諸会社役員録 第20回』239頁。
- 18) 解体後の建材の一部はそれぞれ豊中市、そして神戸市の海外移住と文化の交流センターで保存されている。

主要参考文献

- ・池田市史編纂委員会編『新修池田市史第3巻近代編』、池田市、2009年。
- ・井下清「緑地街道を五十年」前島康彦編集『井下清著作集 都市と緑』所収、財団法人東京都公園協会、1973年(初出1954-1958年)、pp. 235-264。
- ・岡本秀徳「珈琲普及の殿堂『カフェーパウリスタ』(前編)」『コーヒー文化研究』第17号、2010年、pp. 41-59。
- ・岡本秀徳「珈琲普及の殿堂『カフェーパウリスタ』(後編)」『コーヒー文化研究』第18号、2011年、pp. 36-57。
- ・奥山儀八郎『珈琲遍歴』、旭屋出版、1974年。
- ・加藤紫芳『宝塚温泉案内』、矢島誠進堂、1903年。
- ・京阪神急行電鉄『京阪神急行電鉄五十年史』、京阪神急行電鉄、1959年。
- ・小林一三『逸翁自叙伝—青春そして阪急を語る』、阪急電鉄株式会社総合開発事業本部コミュニケーション事業部、2000年(初版1979年)。
- ・商業興信所編『日本全国諸会社役員録』、商業興信所。
- ・白幡洋三郎『近代都市公園史の研究—欧化の系譜』、思文閣出版、1995年。
- ・全日本コーヒー商工組合連合会日本コーヒー史編集委員会編『日本コーヒー史』、全日本コーヒー商工組合連合会、1980年。
- ・竹村民郎「文化環境としての郊外の成立 阪神電鉄PR誌『郊外生活』に関連して」『竹村民郎著作集Ⅲ 阪神間モダニズム再考』所収、三元社、2012年(初出1998年)、pp. 121-149。
- ・中牧弘允「旧カフェーパウリスタ箕面店が提起する問題」『JICA 横浜海外移住資料館研究紀要』2013年度、2013年、pp. 37-47。
- ・西島雄造『日比谷松本楼の100年—日比谷公園と共に』、日比谷松本楼、2003年。
- ・西宮コミュニティ協会『宮っ子238号』、2001年。
- ・武藤誠編集『西宮市史第3巻』、西宮市、1967年。
- ・長谷川泰三『日本で最初の喫茶店「ブラジル移民の父」がはじめた—カフェーパウリスタ物

阪神間の消費生活文化の源流を考えるにあたって (一)

- 語』、文園社、2008年。
- ・初田亨『百貨店の誕生』、筑摩書房、1999年。
 - ・阪神急行電鉄株式会社編『阪急沿線案内』、阪神急行電鉄、1924年。
 - ・阪神電気鉄道株式会社臨時社史編纂室編修『輸送奉仕の五十年』、阪神電気鉄道、1955年。
 - ・藤井忠徳『寶塚案内誌』、たから新聞社、1913年。
 - ・星田宏司『黎明期における日本珈琲店史』、いなほ書房、2003年。
 - ・前島康彦『東京公園文庫1 日比谷公園—日本最初の洋風国民広場—』、郷学舎、1980年。
 - ・松田壮志郎『寶塚沿線名勝誌』、1920年。
 - ・UCC コーヒー博物館監修、神戸新聞総合出版センター編『神戸とコーヒー—港からはじまる物語』、神戸新聞総合出版センター、2017年。
 - ・ラドヤード・キプリング著、加納孝代訳『キプリングの日本発見』、中央公論新社、2002年。
 - ・大阪朝日新聞 明治45年1月26日。
 - ・大阪時事新報 明治44年6月24日。
 - ・大阪時事新報 明治44年7月3日。
 - ・官報 大正8年10月23日。
 - ・西宮市ホームページ <https://www.nishi.or.jp/bunka/rekishitobunkazai/mukashiphoto/koyoensatsuei.html>、2022年1月1日閲覧。
 - ・放香堂ホームページ <https://www.hokodo.co.jp/history.html>、2022年1月1日閲覧。
 - ・箕面市ホームページ <https://www.city.minoh.lg.jp/soumu/shishi/column/topic-1.html#paulista>、2022年1月1日閲覧。